

身体が語りはじめるとき

— J.M.クッツェー『夷狄を待ちながら』における拷問について —

大 場 久 恵

はじめに

J.M.クッツェーの第三作目の作品となる『夷狄を待ちながら』（原題 *Waiting for the Barbarians*）（1980年）は、彼の他の多くの作品と共通して、暴力、特に帝国主義や植民地主義のなかで政治的に利用される暴力、そしてそこにみられる支配者側の病理を描き出しているものである¹⁾。開拓者達の暮らす辺境の町に、「夷狄」がやってくるという噂が首都から届くようになり、「帝国」の治安警察からジョル大佐という将校が派遣されてくる。町で二十年以上民政官を続けてきた語り手の「私」は、夷狄の軍勢をその目で見れば信じもしようが、実際にはなにひとつ目撃していないし、夷狄が攻めてくるのではないかという悪夢はこの町に住む者にとって逃れられるものではないがしかし「夢想」にすぎないのだと考えている（23）。そしてジョル大佐の繰り返す囚人への拷問に対して強い反発の念を抱き、自分なりの抵抗の仕方を模索してく。夷狄が攻めてきて間違いなく戦争になるだろうからと、帝国が「予防手段」（23）の戦争をしかけていく過程を暴き出すこの物語は、9.11以降の世界の文脈においてみても多分に示唆に富む作品といえる²⁾。

本稿では、物語の中核を成すジョル大佐の拷問に注目していく。凄惨な拷問は、帝国の権力を持つ者とそれに従属させられる者との力の関係を暴力によって形成する手段として表されている。ジョル大佐は、囚人へ猛烈な痛みを与え彼らの肉体を破壊することによって、「真実」を得られるのだと言う（17）。痛みの中にある身体の表象について論じたエレイン・スカーリーは、身体的な痛みこそが現実を絶対的に定義するもののだと言う。そして、痛みを受けている囚人ではなく、痛みを加えている拷問者が現実を定義することができるのだということが、スカーリーの身体痛みと言語との関係の分析を通して理解することができる。スカーリーは著書 *The Body in Pain* (1985) において、身体的な苦痛とその様々な語彙や文化的様相との関係を研究しているが、そのなかで拷問を、身体的な痛みの表現のしよのうのなさが政治的に利用される場として詳しく論じている。拷問中の尋問で、圧倒的な痛みを加えられた囚人はもはや言葉を失っていく。そうすると、拷問をかけるほうが自分の求めている答え、つまり「真実」を得ることができることになるのである。ローズマリー・ジェーン・ジョリーは、植民地主義者のジョル大佐が暴力を使って他者である夷狄から得ようと欲しているものは、「自己認識」、「self-recognition」(Jolly 124) であると指摘している。激しい痛みの中にある他者は、痛みという確かな感覚をもっており、現実を

仲介する存在となり、植民地主義の支配者のアイデンティティに確かな真実を与えることになるのである。

また、本作品で繰り返される拷問は、小説家クッツェーが、極限の痛みの中にある身体をどのように表現し、身体に何を語らせることができるのかという問題に果敢に挑むなかで描き出したものともいえる。拷問の被害者である夷狄の少女への民政官のフェティシズム的な欲望は、傷ついた少女の体をテキストとして読みその意味を理解することによって「世界史の秘められた一章」(58) が埋もれずに語られるのではないかという期待と重なり、ジョル大佐への民政官の「私」なりの敵対の手段となっている。本論では、まず、エレイン・スカーリーの*The Body in Pain*を通して、身体的痛みがどのように「声」に変換されるのかを把握し、ジョル大佐による他者の痛みを通して真実を得る拷問の構造を分析し、そして民政官の夷狄の少女の身体を解釈することへの渴望をみていく。そして、拷問がどのようにして植民地主義の歴史を再生しているのかを考えていきたい。

1 身体的痛みが「声」へと変わるとき

エレイン・スカーリーは、身体的な痛みが、それ自体は声をもたないものであるはずだが、最終的には声を得て、物語を語り始める過程を論じている。まず最初に、痛みは決して共有することができないという特質を指摘しながら、いかに身体的痛みというものが言語を破壊していくのかを示している。「痛みがどんなものであろうとも、それは決して他人には共有できないものである。そして痛みは、言語への抵抗によって、この共有することの不可能さ、“unsharability”を確実にしている」(Scarry 4)。「言語への抵抗」とは、激しい痛みにも苦しむ者はただ叫んだり呻いたりする以外にはほとんど何も話すことができなくなることを示しており、話して誰かに伝えるということを止めてしまうために他者と痛みを共有することが不可能になることを言っているのである。また、「身体的痛みは単に言語に抵抗するだけでなく積極的にそれを破壊していると言える、なぜなら、人間が言語を獲得するより前の状態、音を出したり叫んだりするだけの状態への突然の回帰を引き起こすからである」(Scarry 4)。いかなる言語や文化でも、痛みを表現することができないのは痛みそのものの特質に理由があると言える。人間の他の内面的感覚に比べると、痛みにはそれに対応する内容がないからである。例えば、悲しいという感覚には、誰かが亡くなった、という事実があり、悔しいという感覚には試合に負けた、などの事実が対応するが、痛いという感覚には、痛いという身体的な感覚しかない。我々人間の内面は単に感覚を持つということではなく、誰かや何かのために感覚や感情を持つ。つまり、全ての感情は外の世界に対象があるものである(Aさんを愛している、試験が大嫌いだ、といった感情のように)。我々の感情は体から離れて外の共有できる世界へと出て行くのである。一方、我々が痛いと感じるときは、痛みそのものが我々自身の体に苦痛を与える。痛みは、何のものでも、何のためでもないものである。スカーリーは痛みの言語への抵抗という問題を最初に取り上げたのはヴァージニア・ウルフであると指摘しているが、ウルフは、患者が医師に痛みを説明しようとした瞬間に「言語が突然枯れはじめる」と言う³⁾。痛みを表す語彙が欠如し、痛みを表現することができないために、まわりの人々と共有することを阻まれ、言語への抵抗、言語への疑念へとつながるのである。

しかしスカーリーは、痛みとそれを信じるものの関係に疑問を投げかけ、ある政治的あるいは文化的な状況においては「言語への信頼」“trust in language” (Scarry 8) が起こり得る、なぜなら人間の声は内面で起こった出来事を外面に見えるものとして描く力をもっているからであると主張する。痛みのための語彙がないので、痛みそのものを表現することは単純に不可能である。よって問題は他の現象、つまり痛みのある状況をどのように説明するのか、という問題へと移っていくと説明する。臨床試験の記録や芸術家の物語といった文書は、痛みが現れた状況を記録し説明し、痛みをまわりの人々と共有することができるディスコースの領域へともっていくことを可能にするのだと指摘する。文学における痛みの表象は、作家が、身体的な痛みを言語の領域へと入れることにいかに挑戦しているのかを示していると言える。ウルフが痛みのための語彙がないことに苦言を呈したように、通常の作家であれば痛みの前に沈黙してしまう。しかし、身体的な苦痛という目に見えない経験を目に見えるものにしようと果敢に挑む作家により書かれたテキストもあるのである。隠喩を用いる、あるいは単に体の傷を説明するなどして、痛みの本質を示そうとしている。

痛みそのものより、痛みのまわりにあるものが強い関心の対象になる特異な状況の例として、スカーリーは拷問を分析している。拷問は、政治的な文脈における痛みの表象として説明される。拷問では、拷問者が囚人に質問を繰り返し答えを得ることが目的であり、痛みを加えることよりも尋問のほうが重要な局面となる。つまり、痛みを加えることによってどのような答えを得られるかが問題となり、拷問は一つの「情報収集」“information-gathering” (Scarry 12) の形式となるのである。『夷狄を待ちながら』のジョル大佐の拷問は、圧倒的な痛みを夷狄の囚人に加えることにより彼の求める答え、「真実」を得ることが可能となり、支配者と被支配者、帝国とその敵の存在を定義づける場となる。次に、痛みが身体の内にも留まるのではなく、政治的な物語を形成し始める様子を、ジョル大佐の拷問を通してみていくこととする。

2 ジョル大佐の拷問

拷問では、身体的な痛みにも常に尋問がともなう。単なる身体への苛めではないので、ただ痛みを加えるだけでは拷問とはならない。拷問者の目的は囚人から情報を得ることであり、痛みとともに繰り返される質問と返答が拷問の中核の部分形成するのである。スカーリーの言葉で言えば、身体的な痛みと言語的な活動が親密に関係し、相互作用が起こる場、そしてそれが政治的な機能を果たす場が拷問だと言えるだろう。

ジョル大佐は、帝国の治安警察の特別部隊である「第三局」(“The Third Bureau”) から夷狄の問題を解決されるために派遣された将校である。平穏な生活が送られていた辺境の町に、首都から、夷狄の間に不穏な動きがある、武装した彼らと戦争が起こるだろうという噂が届くようになり、帝国は予防手段を講じなければならなくなったのである。ジョル大佐は、民政官の「私」が単なる漁民だと説明する者や、小さな取引をしに町にやってきただけの夷狄の親子を囚人として拷問にかけていく。ジョル大佐が、拷問によって、夷狄は武装しているという答えを引き出し、夷狄は戦わなければならない敵である、という彼にとって「真実」の定義づけを可能にする様子は、ガヤトリ・スピバックが説明する「他者」の形成の過程と重なる。民政官の「私」の立場か

らみれば同じ空間で取引の相手として共存しうることが可能である人々を、帝国主義者のディスコースは、夷狄、敵、他者として排除し、支配の対象へと変える。ジョル大佐は拷問によって、「夷狄」という他者の存在を作り出すことによって、自分自身の、そして帝国の「真実」のアイデンティティを確立することができるのである。

異なる立場のジョル大佐と民政官の「私」との会話は、夷狄の攻撃の可能性があるという緊急的な事態において、あるいはそのような状況を作ってこそ、真実が得られるのだということを表している。ジョル大佐は、民政官との間にあるような「日常の会話」と、拷問中の尋問のような「ある特定の状況」とは異なるのだと説明する(16)。日常とは決して相容れない緊急の場で、「まず最初に嘘がある、そこで圧力をかける、するとさらに嘘が重ねられる、そこでさらに圧力を加える、と潰れる、そこでもっと圧力をかけ、それでやっと真実が得られるというわけだ。こうやってはじめて真実は得られるものなのだ」と言う(17)。圧倒的な痛みという事実が囚人に質問の意味を見失わせ、拷問者の求める答えを提供することになる。窃盗の嫌疑で捕えられた父子が圧力を加えられて盗人であると罪を認めることは、単にそのことだけに留まらず、夷狄は敵であるという「真実」をジョル大佐にもたらし、実際に夷狄を殺戮するための遠征隊が帝国によって派兵されることを意味するのである。ローズマリー・ジェーン・ジョリーは「夷狄の罪の立証は」尋問者にとって自分の仕事を達成したという「賞」であると指摘しているが(Jolly 12)、囚人が痛みのなかで自分の意識、自分の世界、自分自身を失ったとき、拷問者は自らを支配者、勝者として確立することができるのである。

それゆえに、囚人が既に決められた答えを言うことを強要される尋問は、拷問の中で最も重要な役割を果たすのである。それは、尋問の過程において痛みの「逆転」が起こり、拷問者と囚人の間の権力関係を定めるからである。スカーリーは、拷問者には、拷問中の身体的な出来事という点では、何もない、と指摘する。「拷問者には、ただ欠如が、痛みの欠如があるだけである。何かがある(“having”)という点で囚人との間に隔たりがあるとすれば、両者の間にある違いは言葉を持っているか否かという違いである。痛みが欠如している者には世界が存在し、痛みが存在している者は世界を失っているのである」(Scarry 37)。「苦痛こそが真実であり、それ以外は全て疑わしい。それだけがジョル大佐との会話から私が得た教訓である」(17)と「私」が言うように、ジョル大佐にとっては痛みだけが明らかな現実をもたらししてくれるものである。しかしそれは、自分の経験する痛みということではなく、他者の痛みを通して現実を経験するのである。痛みが加われば加わるほど、囚人は自分の言葉を失っていき、世界が見えなくなっていく。このように身体的な差異(痛みがあるか否か)が言葉の差異へと変換するという現象が起こるため、身体的な痛みが他の人間の(この場合は拷問者の)権力として理解されることになるのである。それゆえに、拷問は身体的差異から言葉の差異への変換が政治的に機能する状況のもっとも極端な例として理解されるのである。拷問者は、「他者の意識であるにも関わらず、と言うよりも他者の意識を通してだからこそ、世界に足をつくことができる」からである(Scarry 37)。

拷問が執り行われる拷問部屋は、身体の痛みのまた別の形の表象である。スカーリーは拷問が行われる個室を「身体の延長」でもありまた「世界の縮小」でもあるという視点でみることを提示している(Scarry 38)。個室は、内なる自己を外の世界から守ってくれたり外の世界へと出させてくれるものであるという意味においては、身体の拡大としてみることもできるが、壁に囲ま

れた、文明の世界の縮小版として見ることもできる。また、「窓ひとつない小屋」の「ひんやりとした暗い内部」は(10)、拷問のもうひとつの有効な武器として存在し、囚人を圧迫する。この拷問部屋こそが、クッツェーの拷問への注目を促したのである。クッツェーは、“Into the Dark Chamber: The Novelist and South Africa”において、南アフリカ文学での拷問の表象というテーマについて論じており、拷問部屋を、「独裁主義とその被害者の関係を表す、あらわで極限的な隠喩である」と述べている(Coetzee 13)。囚人に痛みを加えることによって拷問者に勝利と権力をもたらす閉ざされた空間は、帝国の独裁主義そのものの象徴なのである。

また、拷問部屋は小説家クッツェーにとって小説を書く行為を表す隠喩ともなっている。「暗い禁断の部屋は小説のファンタジーそのものである。猥褻なものを創造し、それを神秘で包んでいて、その閉ざされた部屋という状態は、小説が表現するという行為にとりかかるための前提条件を提供している」と述べている(Coetzee 13)。重い扉の向こうで何が行われているのかとやむことなく想像する「私」は、禁断の部屋を表現することに挑戦する小説家と重なる。拷問の情景そのものは描かれていないので読者は語り手である「私」による傷ついた体の描写を通じてのみ拷問を知ることができる。つまり、身体が物語を語るなのである。この過程は小説における語りの構造、語り手を通して読者に世界が見える構造と重なる。

痛みを加えることだけでなく、繰り返される質問や閉ざされた空間といった状況もが武器となって拷問に加わり、拷問者に勝利をもたらす。痛みのなかで、脅しだけでなく時にささやかれる甘い声に誘導され、囚人は拷問者の思いのままの答えを提供する。犯してもいない罪を認めるという結果へと導く痛みは、自分自身への裏切りをもたらす。もはや、「身体が痛む」という感覚だけでなく、「身体が私を痛める」という苦悶の感情をも生み出している(Scarry 47)。拷問部屋における尋問という装置が囚人の自己と身体を分裂させているのである。他者の身体に絶対的な痛みを与えその声を消滅させることによって、帝国主義者が自己の存在を定義することを達成する過程をジョル大佐の拷問は示しているのである。

3 歴史の記録としての身体

ジョル大佐が拷問を執行することにより自分自身を勝者として定義することが可能になっている一方で、夷狄の少女との関係を通してジョル大佐とは異なる世界、別の歴史の見方を提示しようとした民政官の企ては叶うことがない。ジョル大佐の拷問を受け、足は捻れ半分盲目になった夷狄の少女を介抱し親しい関係を深めようとする民政官の行為は、一見、リベラルなヒューマニズムに突き動かされているもののように思われる。しかし、彼が求めているのは、少女の身体をテキストとして「読む」ことなのである。なぜなら、彼は少女の身体の傷跡が拷問の物語を語ってくれるものと信じているのであり、ジョル大佐が体現するような帝国によって語られるのとは異なる歴史の物語を少女の身体が語りかけてくれることを期待しているからである。民政官の日頃の趣味は考古学である。廃墟の発掘に出かけ、特に文字の刻まれた木簡に興味を示している。自分がやっているのはせいぜい地表を引っ搔くくらいのものであり、木簡の文字の解読に成功することができれば、地表の下深くに広がる世界、辺境が開拓されるよりもずっと昔に遡る人々が語りかけてくることになるだろうと願っている。そんな民政官にとって、夷狄の少女の「肉体に

つけられた跡」は、彼の発掘した木簡の文字と同じように、「何であるか解明され理解」されなければならないテキストなのである(73)。ジョル大佐の拷問や、夷狄を砂漠に穴を掘って埋めさせるようなやり方で帝国の歴史を作ること、「それは私の取る道とはならないであろう」(58)という民政官は、どのようにして別の道を模索したのかを見ていきたい。

民政官の夷狄の少女に対する感情は、一人の女性への愛情ではなく、読むべき記録に対する偶像崇拜的なものである。民政官は、ジョル大佐の拷問の後に物乞いや売春をして生きていた少女に、家での手伝いのような仕事を提供することによって迎え入れ、やがて二人の間には男女の親密な関係が始まる。しかし決して愛情のある人間的な恋愛関係とは言えない、フェティシズム的なものである。それは特に少女の足を洗ったり脚に触れることに最高の喜びを感じている民政官の姿に表れている。閉ざされた拷問部屋の外に置かれていた彼に、少女の身体の傷は、生々しい拷問の現実を伝えてくれるものとなる。初めて傷ついた少女の身体と間近に対峙するとき、彼は「自分自身と女の苦痛との間の距離が無視できぬほど近いことを悟り、思わず身震い」するのである(65)。かつて、「日常の会話」とは違う、「特定の状況」である拷問の尋問において「真実」が得られるというジョル大佐に反発の念をあらわにした民政官であるが(16)、皮肉にも彼もまた、夷狄の少女との関係においては、男女の恋愛における「日常」である実際のセックスのような行為では少女に期待する「真実」を得ることはできず、拷問で傷ついた身体という「特定の状況」を通して身震いするほどの「真実」を得ることができるのである。スカーリーが「身体は経験した痛みの中の何かを実際に痛み苦しむ肉体の外にいる誰かに伝える」と言うように(Scarry 15)、少女の身体の傷は、民政官に現実世界での官能的な経験をもたらす。民政官にとって、少女の身体は拷問における暴力、そしてそのむこうにある真実を語りかけるテキストなのである。

民政官が少女の身体を浄化することに執着する様子にもまた、ジョル大佐とは異なる道を示したいという彼の焦燥が表れているようである。民政官は浄化ということについて何度も言及し、拷問部屋にせよ、少女の身体にせよ、清めなければならないと脅迫観念のように思っているようであるが、それはあくまでも彼にとって、通常の世界が清浄な世界であるからである。民政官は、ジョル大佐を眺めながら心のなかで、「はたして彼は、ふたたび清浄な世界に戻って人々と食事をともにするために、閉ざされた扉の向こうで、なにかしら個人的な浄化の儀式でも行うのだろうか」と考える(32-33)。ジョル大佐の携わる拷問という「特定の状況」を否定し、清浄な「日常の」生活、法と秩序の支配する自分の世界こそがあるべきこの町の通常の姿なのだと信じている。拷問が行われた部屋は、民政官という立場から直ちに清掃を命じ、また夷狄の少女と会うとき、彼は必ず「浄化の儀式」(71)と称して少女の足を洗うことから始める。こうして彼自身のやり方で、帝国やジョル大佐がもたらす異常な「特定の状況」に対抗しているのである。

民政官はついに少女をテキストとして解釈し真実を得るという願いを達成することができないままとなる。二人の会話において、民政官は何度も拷問について問うが、少女は決してはっきりしたことは答えない。ジョル大佐の囚人の場合とは異なり、少女は民政官の願望を成就するために従うことはない。また、半分盲目であるがゆえの独特の視線が謎めいた雰囲気をもたらし、民政官が彼女を完全に把握することを不可能にしているようでもある。ディック・ペナーは「夷狄の少女にはこの慈悲深い主人に仕える以外の選択肢はないのだが、その精神においては決して従属していない」と指摘している(Penner 79)。少女の沈黙が主人に対する決定的な手段の抵抗と

なり、主人の言葉をも奪う。民政官は、拷問について決して話そうとせず首を振るだけの少女を前に、言葉を発しようとするがただ空白が落ちてくるだけのような感覚に苛まれるのである(75)。

夷狄の少女を理解することの不可能さは、いくつかの視覚的なイメージにも表れている。民政官は少女の顔をスケッチしようとして鉛筆を取るが「どう書きはじめていいかわからないことに思い当たる」(108)。少女の特徴が思い出せないのである。また、拷問で傷つけられるよりも前の少女、一度は見かけているはずのその姿を思い出そうとするが、「あの女のいるはずのところには、空間が、空白があるだけ」で、思い描くことができない(109)。凄惨な拷問を物語る傷跡の残る少女の身体が、真実を伝えてくれるテキストであり、別の道を模索する自分にとってのもう一つの歴史の記録である、と信じていた民政官であるが、少女は結局姿の描けない空白であると認識せざるを得ないことを知る。そして少女を夷狄の民に返す旅に出る。少女を理解することができず、別の道である新しい関係（実際彼が最後に提案したような、再び町に戻り今度は人間的な愛情を交流させる男女の関係）を築くことはついでできないのである。

おわりに

少女を返したことにより夷狄と通じていると疑われた民政官自身が拷問の対象となり、帝国の強要する歴史への民政官の抵抗は無惨に終わる。皮肉なことに民政官は、趣味で集めていた木簡を夷狄との交渉のメモと考えられて捕えられるが、このことは木簡の文字が幾通りにも、どのようにも解釈が可能であることを示唆している。かつて地表の下に広がる壮大な歴史が語りかけることを民政官に夢想させたものが、いまや彼を拷問へと陥れる証拠となっている。そして、彼はまた別の解釈の可能性のために木簡を後世に託すのである。木簡一枚一枚に亜麻油を塗り、布で包み、もと発見したところへ再び埋めにいこうと決める。デイビッド・アトウェルはこれに関して、民政官は、ジョル大佐の権力と帝国の伝統への重要な抵抗として木簡をこのように利用しているが、依然として歴史の「空虚なシニフィエ」“empty signifiers”を歴史認識の明確な形へ変換するという問題を解決していない、としている(Atwell 78)。少女の身体や木簡という何を意味するのか定まらないものを帝国主義の物語から解放はしたものの、未だ空虚のままに他に委ねてしまい、彼自身の考える歴史の中に意味をもって位置づけることをなし得ていないのである。

注

- 1) 本稿での*Waiting for the Barbarians*の引用は、全て土岐恒二訳『夷狄を待ちながら』を用いている。
- 2) Thomas P. Crockerは、“Still Waiting for the Barbarians: What is New about Post-September 11 Exceptionalism?”で、ジョル大佐を緊急事態にある国家の例外主義的な資質を体现するもの、そして民政官の「私」を法の支配による通常の生活を体现するものとし、この両者が決して両立しない世界を論じている。また、アメリカの現代音楽家Philip Glassがクツツエーの作品に基づいて作曲したオペラ作品“Waiting for the Barbarians”の2007年のプレミアに関する*The New York Times*記事においても、「アパルトヘイトの寓話であるこの小説は現代のイラク情勢と類似している」と紹介されている。
- 3) スカーリーは“On Being III”よりウルフの議論を引用している。「英語という、ハムレットの思考や

リア王の悲劇をも表現した言語に、震えや頭痛を表すための言葉がない。…純粋な少女が初めて恋に落ちたとき彼女には自分の気持ちを説明するためのシェイクスピアやキーツの言葉があるだろう。しかし頭痛に苦しむ患者に医師に痛みを説明させてみると、とたんに言語が枯渇する。」(Scarry 4)

引用文献

- Atwell, David. *J.M. Coetzee: South Africa and the Politics of Writing*. Berkeley: University of California Press, 1993.
- Coetzee, J.M. *Waiting for the Barbarians*. 1980. London: Vintage, 2000.
- …『夷狄を待ちながら』土岐恒二訳。集英社文庫、2003年。
- Jolly, Rosemary Jane. *Colonization, Violence, and Narration in White South African Writing: Andre Brink, Breyten Breytenbach and J.M. Coetzee*. Johannesburg: Witwatersrand University Press, 1996.
- Parry, Benita. "Speech and Silence in the Fictions of J.M. Coetzee" *Critical Perspectives on J.M. Coetzee*. Ed. Graham Huggan and Stephen Watson. 8:138-151. London: Macmillan Press Ltd, 1996.
- Penner, Dick. *Countries of the Mind: The Fictions of J.M. Coetzee*. London: Greenwood Press, 1989.
- Scarry, Elaine. *The Body in Pain: The Making and Unmaking of the World*. Oxford: University of Oxford Press, 1985.
- Spivak, Gayatri. "The Rani of Simiur" Francis Barker *et al. Europe and Its Others. Vol.1 Proceedings of the Essex Conference on the Sociology of Literature*. Colchester: University of Essex, 1985.